

成 助 費 航 渡 外 海

IFRWH & Women's History Network: International Conference
'Women's Histories: The Local and the Global'
女性史研究国際連盟と女性史ネットワーク国際会議
「女性史:ローカルとグローバル」

神奈川大学外国語学部・非常勤講師
小島美枝子

主催団体 International Federation for Research in Women's History (IFRWH、女性史研究国際連盟) & Women's History Network (女性史ネットワーク)
開催期間 2013 年 8 月 29 日から 9 月 1 日
開催地 Sheffield Hallam University, UK (イギリス、シェフィールドハラム大学)
開催規模 世界各地から約 300 人(英国、フランス、アイスランド、フィンランド、ドイツ、オランダなど欧州からが多いが米国、旧ソ連、オーストラリア、日本、バングラデシュ、インド、ナイジェリア等約 40 カ国から参加)

【参加目的】

自分の専門分野の女性史の国際会議に参加し分科会で発表をさせてもらい、コメントや質問の内容から自分の研究で不十分な点を問い直し論文にまとめる。自分の研究に関してアメリカ人研究者と接する機会があったが、アメリカ以外の研究者と接する機会が極めて限られていたので、英国で開催される女性史会議に参加し、各国の研究動向や問題意識を学びつつ、自分の研究の視野を広げたい。

【会議概要】

本年度のメインテーマは The Local and the Global で、11 のサブテーマごとにパネルが組まれる。会議の使用言語は英語とフランス語。基調講演は、初日、二日目、三日目とそれぞれ一人。初日は、ロンドン大学 Catherine Hall 教授、講演題 Gendering the legacies of slave-ownership, 二日目 西オーストラリア大学 Jaqueline van Gent 教授、講演題 Rebecca and Her Sisters: Indigenous Women, Gendered Authority and Global Mission Networks, 三日目ミシガン大学 Mrinalini Sinha 教授、講演題 Kunti's Protest: The Paradox of Gender in Anti-Colonialism

【発表内容】

(発表課題) 本会議のメインテーマは The Local and the Global で、その中のサブテ

マの一つである Life Histories across geopolitical divide 部門の Transnational education and the lives of female educators のパネルで発表。発表題、Anna C. Hartshorne and the Founding of the Philadelphia Committee

(発表概要)1900年に創立した女子英学塾は、ミッションスクールでもなく官立でもない。津田梅子の友人たちを中心とするアメリカ女性たちの有志の会、フィラデルフィア委員会が成立し、創立期には同委員会が経済的援助を行い、女子英学塾が創立発展した。その委員会の中心人物は米国フィラデルフィア出身のクエーカー女性アナCハツホンであった。19世紀後半、フィラデルフィアクエーカーは分裂状態にあり混乱期にあった。クエーカー名門の出身であるアナは、クエーカーから一定の距離を保ちながらも、日米のクエーカーコミュニティと友好な関係を保ち、そのネットワークを通して女子英学塾の発展に貢献した。

【会議の状況】4日間のうち、基調講演(一時間)が初日、2日目、3日目とあり、2日目、3日目は、朝9時30分から夕方6時までセッションがあり様々なパネルが組まれて研究者たちの発表とフロアとの活発なディスカッションが行われた。ティータイムや昼食時に、ほかの研究者と接することのできる時間が毎日用意されていた。プログラムに関しては、同一時間帯に、聞きたいパネルが重なることが何度かあった。全ての発表教室にプロジェクター、パソコンが完備されており多くの発表者はパワーポイントを有効に活用していた。

【考察】発表後のディスカッションの時間に受けた質問から自分の視野や研究の方向性がいまだに不十分であることに気がついた。今回の発表ではアナCハツホン(以下ACHとする)とフィラデルフィア委員会を中心にだけ述べたが、当時フィラデルフィア委員会の恩恵に預かった女子英学塾に進学できた女性、同世代のうちのどの位の人数(極めて少数であるが、)であったのか、その卒業生たちが当時の日本のジェンダー関係にどのような影響を与えたのかも押さえておくべきことである。ジェンダー史の中で、それが、どうつながっていくのかも常に視野に入れるべきである。予想以上の人数の方が発表を聞きに来てくれ、前向きなコメントを頂いたことに、感謝している。この学会で出会った日本や各国の研究者とネットワークを作り、今後の研究に生かしたい。日本のジェンダー史を研究している外国人が予想以上に多かったことに認識を新たにしたい。彼女たちの存在と研究は、大きな励みになる。自分の研究で日本のことへの言及が不足し不十分であるということがよくわかる。この点を補強しながら、論文を書き進めたい。このような身に余る発表の機会を得たことは大変にありがたかった。遠路英国での学会参加補助をしてくださった財団にこの場を借りて心からお礼申し上げたい。

成果報告書

横浜市立大学大学院都市社会文化研究科博士後期課程1年

矢作 智弘

調査団体 摩訶移住民団体協議会・京畿道外国人 인권センター
富川外国人福祉センター・アジア人権文化連帯

調査期間 平成 25 年 8 月 12 日(月)～平成 25 年 8 月 16 日(金)

調査地 ソウル市鍾路区、京畿道安山市、京畿道富川市

【調査目的】

韓国には製造業、建設業、サービス業、農林水産業など単純技能野に約 60 万人の外国人労働者が就労し、彼らに支援活動をしている団体が約 150 ヶ所ある。その支援の設立母体は、仏教系・キリスト系・市民運動系の三類型に分類可能だ。今回の調査では摩訶移住民団体協議会(仏教系)、アジア人権文化連帯(市民運動系)、富川外国人福祉センター(キリスト教系)の三団体にインタビュー調査を実施し団体ごとの支援活動の差異を明らかにするとともに、今後の韓国における外国人労働者政策の本質を論じるものとする。

【考察】

今回の調査では、韓国の支援団体の設立母体としてはキリスト教系団体が全団体の約 80%を占め、市民運動系が約 18%、仏教系2%となっていることである。この要因として韓国人の約6割がキリスト教信者であることが要因であり、彼らが教会で韓国での社会的弱者に対する支援を行うことで、外国人労働者の存在を知り、そこから派生的に支援の輪が広がり、2001 年に富川外国人福祉センターの結成につながったことがあること。また市民運動系団体は、キリスト教系団体では信仰や宣教という部分が支援の中に生まれてくる歴史がある。そこには中立的視点からの支援が出来ないのではないかと疑問から、宗教色をなくし社会的に脆弱な外国人労働者を純粋に支援しようとの目的で 2004 年アジア人権文化連帯生まれたこと。さらに外国人労働者の中にはスリランカやミャンマー、タイなどの仏教国出身の外国人労働者も存在している。しかし彼らは宗教上の観点からキリスト教系団体に属し支援を受ける事が難し

く、長く孤立している存在であった。しかし 2004 年から単純技能分野に就労している外国人を正規労働者として雇用する「雇用許可制」が実施されたことで、本格的な支援に取り組まなければならない機運が生まれた。そんな理由から、韓国最大の大韓仏教曹溪宗が先頭に立ち、**2006 年**摩訶移住民団体協議会が発足したことがインタビュー調査では明らかになった。団体の活動内容は、どの団体も①韓国語教育事業、②相談活動事業、③各種イベント事業を中心に団体が行っているとの共通点が見られた。特にどの団体も韓国生活する以上、韓国語習得は必須であるとの認識では一致しており、レベル別のクラス運営で韓国語教育には力を入れていた。また韓国人との交流を通じ異文化を相互理解するとの観点から観光地をめぐる文化体験や、体育大会、異文化交流セミナーなども行っていた。

その一方で団体からこんな昨今の外国人政策の実情も聞こえた。政府の外国人政策の中で労働者に対する施策は1割足らずで、それ以外の約9割は、韓国人男性と結婚した外国人女性(結婚移民者)やその子どもに対する政策に重点が置かれている方向に韓国は動いている。その背景として富川外国人福祉センターの担当者は、「今後韓国で少子高齢化を迎え、人口減少や労働生産率が低下する状況の中で、結婚移民者や彼女らの子供が韓国を支えてくれるとの認識が非常に政府内には強い。つまり韓国の今後の経済的・社会的安定には欠かせない人材であるとの考えである。そのために結婚移民者や子女に対する教育中心の支援を、支援団体が助成金の交付を受けながら事業を行っている。その一方、外国人労働者は、あくまでも若年の韓国人労働者層が敬遠する3K 現場の労働力不足を埋める人材としか活用を考えていない。単純技能分野で最長就労出来る5年が経過後は、直ぐに帰国させる人材としか捉えていない。同じ外国人でありながら、対応の全く異なる施策が韓国には存在するという現実がある」とのコメントである。また京畿道外国人 인권センターの担当者からは「支援団体が雇用許可制実施を運動の最大成果と考えていたため、その後の新たな支援展開が生まれず、行政からの助成金が十分に貰え、韓国で数十年生活する結婚移民者への支援活動が今後の団体運営を考える上では得策との考えが強い。そのため外国人労働者支援から結婚移民者支援に団体活動を変更している団体がここ数年顕著に増加している」とのコメントも新たな論点として注目される。

横浜市は私が今回訪問した京畿道と姉妹提携を結んでいる。横浜という世界に開ける海外都市を通じ、外国人労働者が最多の京畿道での外国人労働者支援の取り組みや、外国人として異国に暮らす中での共生に関する問題提起なども今後の課題として横浜市に提言したいと考えている。またそれらに関連する日韓セミナーやワークショップの共同開催実現なども、新たな日韓関係の一步が構築出来る機会ではないかと感じている。

British Association for Applied Linguistics Annual Conference
2013

英国応用言語学会 2013年度 年次大会

横浜市立大学 国際総合科学部・非常勤講師
土屋 慶子

主催団体 英国応用言語学会 (British Association for Applied Linguistics)
開催期間 2013年 9月 5～7日
開催地 イギリス、エディンバラ
開催規模 約20カ国 350名

【参加目的】

BAAL学会に参加することの目的は、以下の2点である。(1)これまでノッティンガム大学の研究者と共に調査・研究を続けてきた、医療コミュニケーション研究の分析内容について、コーパス言語学シンポジウムの一貫として、口頭発表を行うことにより、研究成果を広く周知する。また、(2)BAAL学会にて、世界各地から集まる応用言語学者たちの最新の研究動向について知見を深め、ネットワークを広める。

【会議概要】

英国応用言語学会(BAAL)は、ヨーロッパの大規模な応用言語学会の一つであり、その年次大会には、英国内のみならず、世界各地から多くの応用言語学の専門家たちが参加する。応用言語学の最新の動向を見極める上でも、重要な学会である。

【発表内容】

(発表課題)

Account preface in emergency care discourse: comparing conversations in medical trainings with a simulated patient and a mannequin using a mini-corpus

(発表概要)

本研究は、英国ノッティンガム大学附属シミュレーションセンターにて録音・録画した、救急医療トレーニングでの会話データを、コーパス分析による量的分析と、談話分析による質的分析を統合させた研究手法を用いて、分析したものである。模擬患者(SP)と共に行ったトレーニングと、高度医療マネキン(SPが声を担当)を患者としたトレーニングとを比較し、医療者による患者への医療行為に関する説明の頻度や表現に、どのような違いがあるか分析を行った。結果として、模擬患者を使用したトレーニングでは、マネキンを使用した場合より、より多くの説明がなされていることが示された。また、医療者による医療行為

の提示が、それに続く医療行為の説明の前置き (account preface) としての機能をもつ可能性が示唆された。

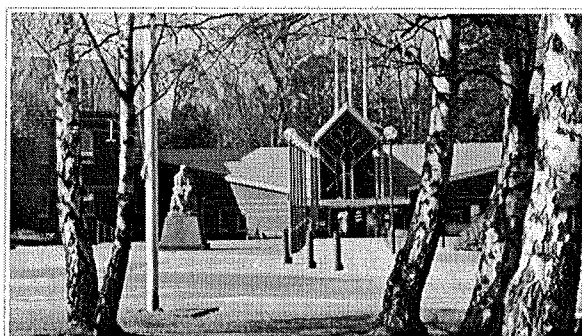
【成 果】

発表に対して、以下の貴重な意見を得ることができた。(1)本研究では、救急医療におけるトレーニングを分析データとしており、参加した医療者チームは、医師1名(医学部5年生)、看護師2名(救急医療センター看護師)の3名で構成されている。そのため、実際の救急医療での医師と看護師との関係性とは異なる可能性があり、医療チームの構成員により、分析結果も異なる可能性があるのではないかと指摘を受けた。今後の課題として、実際の医療現場でのデータ収集についても検討していく。(2)今回の発表では、医療者一患者間の会話を中心に、医療行為の説明に焦点を当てた分析結果を報告したが、救急医療はチーム医療であり、医療者間のチーム内での役割分担、リーダーシップの取り方についても、意見を求められた。医療者の発話語彙数から、医師(医学部生)がリーダーシップを取るチームと、経験のある看護師が主となり医療行為を進めていくケースとが見られた。診療を進めていく上で、医療行為の決断や現場のマネジメントを、誰がどのように主導していくのかという点も、今後の分析課題としていく。

発表の聴講者の中には、医療コミュニケーションを専門とする研究者もおり、研究内容や分析手法について、意見交換を行うことができた。医療やビジネスの場での会話研究、さらにコーパス分析と談話・会話分析の両方を統合した分析手法による研究は、新しい領域であり、BAAL学会にて、それらに取り組む応用言語学者たちと交流を深めることができ、今後の研究を発展させる上で、非常に貴重な機会を得ることができた。

また、最新の応用言語学の動向の一つとして、多言語主義 (multilingualism) に関するいくつかの研究発表を拝聴する機会を得た。Kathryn Woolard教授(ロサンゼルス大学サンディエゴ校)の基調講演は、スペインでのカタロニア語習得における言語政策と、人々のカタロニア語、スペイン語に対する認識に関する研究に関する内容であった。

Authenticity (特定のコミュニティに根付いた、自身を表現するための言語) と、Anonymity (特定のコミュニティに属さない、社会的に中立な言語) という概念とを用い、それぞれの言語のownership (所有権) や社会的役割について、個人のブログをデータとして分析したもので、民族誌的分析手法 (Ethnography) についても知見を深めることができた。



(写真: Heriot Watt Universityの学会会場、BAAL公式ウェブサイトより)

【謝 辞】

学会参加・発表のための渡航費を助成くださいました横浜学術教育振興財団に、深く感謝申し上げます。

第7回 日中(中日)自動車産業研究交流会

横浜市立大学 国際総合科学部 准教授
赤羽 淳

主催団体 産業学会自動車産業研究会／上海交通大学 機械与動力工程学院
開催期間 2013年8月26日(月) 研究交流会
2013年8月27日(火) プラントツアー
開催地 中国上海交通大学 中国安亭上海汽車 中国蘇州ボッシュ中国
開催規模 約50名

【参加目的】

ほとんど情報のない中国地場企業の実態について、日中の自動車関連研究者の7つのセッション(詳細は発表内容に記載)に参加することにより、現在進めている中国地場企業のモノづくり能力の実証研究に関する一次的な情報収集を行う。加えて、個人では絶対にアクセスできない中国メーカー(上海汽車)、欧州系メーカー(中国ボッシュ)のプラントツアーに参加することにより、中国におけるモノづくり現場の実態を把握する。そのほか、研究交流会、プラントツアーには50名近くの参加者が見積もられたが、これらの自動車関連の関係者と交流することで、自身の調査研究ネットワークを広げていくことも目的としている。

【会議概要】

8月26日(月)の自動車研究交流会では、日本側3名、中国側4名の有識者による報告が行われた。それぞれの報告にはあらかじめコメンテーターが用意され、報告に対する補足および課題の提示が行われた。午前9時に開始され、お昼休みを挟んで夕方18時に終了した。

【発表内容】

9:30～10:30 趙福全 清華大学教授(前吉利副総裁)
「中国市場において要求される省エネ・環境技術に対応した技術戦略」
10:40～11:40 徐大全(ボッシュ中国副総裁)
「The Journey to the East: Growth, Opportunity and Challenge」
11:40～12:30 塩地洋(京都大学教授)
「日中韓自動車産業の国際比較」
昼 食 12:30～13:30
13:30～14:30 許敏(上海交通大学校長助理)

「中国自動車産業の破局戦略への提案」

14:30～15:20 富山栄子 事業創造大学

「グローバルマーケティングからみた自動車メーカーの新興国戦略～
トヨタ自動車と現代自動車の事例～」

休 憩 15:20 ～15:40

15:40～16:40 顔光明（「上海汽車報」高級記者）

「中国自動車産業の課題—メディアの視点から—」

16:40～17:30 上山邦雄（城西大学）

「日本自動車産業の新興国市場への取り組み—中国を事例として」

【各発表内容に対して自身の研究課題から見た考察】

現在、自分が進めている研究課題は中国地場企業のものづくりイノベーション能力に関する実証研究だが、今回の研究交流会の各種報告およびプラントツアーは大変に示唆に富む内容であった。特に中国側研究者の報告内容は、中国のモノづくり能力が依然としてモジュール、組み立ての段階にとまっていることを示唆する内容であった。そのことは、摺合せ型、統合型のモノづくり能力に長けている日本企業と中国企業との間に効果的な分業体制を敷くことができることを感じさせる。しかし一方で、自動車分野における日中の分業は必ずしも深化しておらず、そこには企業マインドや日中間のコミュニケーション問題など、別の観点の問題が潜んでいることを示しているようにも感じた。

いずれにせよ、中国市場は今や世界最大の自動車市場に成長し、特に日本の自動車メーカー、自動車部品メーカーにとって、オペレーションをさらに拡大させていく必要のある市場である。そのためにも、さらなる日中間の分業の可能性があること、一方で、そのためにはモノづくり能力という視点のみならず、組織構築やコミュニケーションのあり方など、幅広い観点から総合的に考察していく必要があることを今回の研究交流会、プラントツアーを通じて感じる事ができた。

その意味でも、改めて今回の渡航費を助成してくださった横浜学術教育振興財団殿に感謝申し上げる次第でございます。

1. International Student Workshop: Rekindling Past Glory: A Case Study for Urban Revitalization and Heritage Conservation.
2. Urban Design Seminar on Historical conservation and creative city.
 - 1、国際学生ワークショップ「眠れる巨人がよみがえるーサン・ミゲルの活性化と遺産保全のケーススタディー」
 - 2、アーバンデザインセミナー：歴史の保全と創造都市

横浜市立大学国際総合科学部特別契約教授
国吉 直行

主催団体：持続可能な都市づくりのための国際アカデミックコンソーシアムまちづくりユニット (Urban Planning Unit, International Academic Consortium for Sustainable Cities: IACSC)

開催期間：8月29日～9月6日)

開催地：サンミゲル、マカティ（フィリピン）

開催規模：参加国数 5カ国 参加者数 40名

【参加目的】

- 1、国際学生プログラムの実施による国際交流及び異文化理解の促進
- 2、歴史的環境保全の取り組みに関する手法や知見の共有・ディスカッション

【会議概要・内容】

1、国際ワークショップ

フィリピン大、横浜市大の学生協働作業による、サンミゲルの歴史資産、自然資産調査、及びこういった調査をもとにしたサンミゲル4地区に対する、活性化と都市遺産保全のケーススタディ、提案作成を行い、発表を行った。

◇期間 2013年8月29日～9月4日

◇参加者 フィリピン大学大学院生 25名

横浜市立大学学部生 9名

京都大学大学院生 1名

ベトナム国家大学講師 1名

◇成果物 アイディアカード 100枚

AOポスター 4枚

【発表内容詳細・講評】

記録集冊子を参照ください。

2、アーバンデザインセミナー

◇セミナーテーマ：歴史環境の保全と創造都市

◇開催日時：9月5日 13:00～16:50

◇開催場所：マカティ市役所セミナーホール

◇参加者：90名

◇セミナー内容

I 横浜からの発表—歴史文化を生かした横浜の都市デザイン活動

①横浜市の歴史を生かしたまちづくりと都市デザイン活動

②横浜市の創造都市政策

③黄金町地区での大学と市民の取り組み・活動

このうち、①について私（国吉直行）が発表しました。

II フィリピンにおける取り組み発表3

III アジア各国都市の取り組み—ベトナム、ネパール

IV パネルディスカッション

【考察】

1、国際ワークショップ

サンミゲルでのワークショップによる提案・発表を生かした今後のフィリピン大学による地域活性化などの取り組み協力を継続・活発化させること、具体策としてサイン整備などに着手するきっかけづくりの検討を行うことなどが確認された。

2、アーバンデザインセミナー

歴史環境の保全と活用は、都市化・近代化の進むアジア各都市の共通の課題となりつつあり、各国政府も重視している。今後、継続して議論を深め、アジア都市としての保全活用理論と施策を築けるよう大学間協力関係を深めることが確認された。

このような成果をふまえ、アジア都市における歴史資産保全と都市デザインについて、今後、横浜市立大学などの役割が増大することを予感した。

ペルー北部沿岸における水温の長期モニタリング

横浜商科大学商学部・教授
小林 雅人

主催団体	横浜商科大学およびペルー国立La Molina農科大学
出張期間	2013年8月25日～9月8日
開催地	ペルー共和国 (Lima～Tumbes)
開催規模	参加国:2国, 調査協力者:10名
共同研究者	Luis Icochea 教授 (国立La Molina農科大学水産学部教授)

【調査目的】

狭義のエルニーニョとは、南東貿易風が弱まることによりペルー沿岸域の湧昇流が弱まり、それに伴い赤道海域から暖水が南下する現象である。この現象は12月に起こることが多いためにキリストの誕生日（クリスマス）にかけて、キリスト（ニーニョ：男の子）がやって来たと、漁師達は暖水のことをエルニーニョと呼んだ。このエルニーニョは、アンチョベータ（カタクチイワシ）の不漁と引き換えに暖海性のマグロ、カツオ、シイラなどの魚類をもたらし、乾燥した大地を潤す恵みの雨をもたらしたことから神と呼ばれた。しかし、漁業が産業化し、人口が増加して洪水が災害となった近代では、神ではなく悪魔になってしまった。本研究では、暖水が赤道海域からペルー沿岸を南下する局所的なエルニーニョに焦点を当て、この現象を高精度で検出するために、ペルー北部沿岸（9ヵ所）に集中的に水温連続測定装置（水温データロガー）を設置し、合わせてペルー北部沿岸で漁獲されるアンチョベータなどの漁獲量変動との関連性について解析する。なお、小規模なエルニーニョは06-07年に発生しており、その後ラニーニャ（エルニーニョの逆の現象）となってから中立状態に戻った。そして、2009年5月から再度エルニーニョが発生し、2010年春季に終息した。その後、ラニーニャが発生したが2011年春季には終息した。現在は中立状態であり、今後の動向が注目されている。

今回の調査では、2013年2月22日～2月28日に設置した水温データロガーからデータを回収し、再設置を行う。また、同時にBTを用いて水温の鉛直分布を測定する。

【調査概要】

2013年8月25日（日）；成田発、米国 Los Angeles 着（UA33 便）。2日間休暇。

28日（水）Houston 発（UA854）でペルー国 Lima へ。Icochea 教授と合流して打ち合わせ。Lima 泊。

29日（木）；国内航空機にて Trujillo へ移動。レンタカーで移動し、Chicama にて水温データロガーを回収するが、PCへのデータ転送インターフェイスが故障しデータが得られなかった。同地にてBTで水温鉛直分布を観測。Chiclayo 泊。

30日（金）；Tierra Colorada にて水温データロガーを回収し再設置して、BTで水温鉛直分布を観測。Talara 泊。

31日（土）；Talara, Cabo Blanco, Ñuro, Los Organos, Mancora, Cancas, Acapulco にてBTで水温鉛直分布を観測。Talara, Cabo Blanco, Mancora にて水温データロガーを

回収し、再設置する。Zorritos 泊。

9月1日(日);Caleta la Cruz, Acapulco にてBT で水温鉛直分布を観測。Zorritos 泊。

2日(月);Acapulco, Cancas, Mancora, Los Organos, Ñuro, Cabo Blanco にてBT で水温鉛直分布を観測。Chiclayo 泊。

3日(火);Chicama にて水温データロガーを再設置し、BT で水温鉛直分布を観測。Trujillo から国内航空機で Lima へ移動。Lima 泊。

4日(水);Callao にて水温データロガーを回収し、再設置する。Icochea 教授と共にデータ整理と結果の検討を行う。深夜、ペルー国 Lima 発(UA855)。

5日(木);米国 Houston 着、2日間休暇。

8日(日);Washington DC 発で成田へ(UA803)。

9日(月);成田着。

【調査内容】

今回の調査では、2013年2月22日～28日に設置した水温データロガーからデータを回収し再設置することが主目的であった。しかし、最初のデータロガー回収地点のChicamaに行くまでにPCへのデータ転送インターフェイスが作動しないことが発覚して、データを全く回収することが出来なかった。インターフェイスは2009年1月に購入し、これまで全く故障がなかった。また、調査出発前の7月に予備ロガーの作動チェックをした際にも使用し、全く問題はなかった。なお、BTを用いた水温の鉛直分布の測定は予定通り実施できた。

インターフェイスの故障への対処は次のように行った。Chicamaに向う車中でインターフェイスが作動しないことがわかり、途中の商店で電池を購入して交換するが改善しなかった。Chicamaで回収したデータロガーはインターフェイスが復旧すればデータの読み出しが出来ることから再設置せずに持って移動した。Chicama港のあるMarabligoでは電気店を探し、接続部分とコードが断線していないことを確認し、インターフェイス本体の故障であることがわかった。大都市のChiclayoに着き、日本のデータロガー輸入代理店に電話して対処方法を尋ねるが解決しなかった。また、ペルー地区の輸入代理店をメールで知らせてもらう。翌日、チリにある代理店にインターフェイスの購入を依頼するが、米国の本社がちょうど8月30日から9月2日まで休業で配送してもらえずに購入を断念した。そこで、データロガーのメモリー容量を計算して2月末に再度回収に行くまでデータを保持できることを確認した。万が一、2月末に回収できない場合には1年分のデータを失うリスクはあるが、エルニーニョが発生しやすい12月から1月のデータを逃すのは惜しいので、今回はデータロガーを回収した後に掃除してデータを回収せずに再設置することにした。

【結果の概要】

今回はデータロガーによって測定された水温の連続記録が得られなかったので、BTによる各港の棧橋での水温変化について述べる。

現地情報では、今年のペルー中部(リマ)の気温は低く、海水温が低下していることによると考えられていた。実際に、Callao(リマ近く)では昨年の冬よりも表面～深度2mまで水温(15.0～14.7℃)が約1℃低かった。この低水温化は北部のChicama(1℃～2℃低い)とTalara(約2℃低い)でも観測された。しかし、Cabo Blanco以北では昨年の冬とほぼ同様の水温であったことから、赤道系の暖水がCabo Blancoまで張り出していることが示唆された。これらの結果は、次回に回収する各調査地点の水温連続記録と比較検討する予定である。

17th International Conference on Crystal Growth and Epitaxy

ICCGE-17

第 17 回国際結晶成長学会

横浜市立大学生命ナノシステム科学研究科物質システム科学専攻・修士 1 年
井上未来

主催団体 Polish Society for Crystal Growth (PTWK), German Association for Crystal Growth (DGKK), 他

開催期間 2013 年 8 月 11 日—16 日

開催地 ポーランド、ワルシャワ

開催規模 参加国数 30 か国、参加者数 1000 人以上

【参加目的】

私たちの研究室で扱っているカーボンナノウォール(CNW)は最先端ナノ炭素材料である。そのため日本で研究として扱っているところは少なく、日本の様々な学会の中でも CNW の基本的な構造でさえ知っている人は少ない。現在窒化カーボンナノウォールは新規燃料電池触媒としても期待されている。しかし、その詳細は明らかにされていない。そのため、より実用的な意見を様々な人から直接聞くためには、国際学会など多くの専門家が集まる場所での発表が必要である。発表することによる効果としては、多くの意見を聞くことにより実用化に向けて新たな考えが生まれることなどが期待出来る。今回、国際会議に参加することで世界に向けて本学・当研究室の先進性を伝えることができ、各大学や研究機関との共同研究なども期待される。

また今回の国際会議は自身初の参加ということもあり、世界各国の研究者との交流ひとつひとつが有益なものとなる。研究についての議論はもちろん、英語によるアウトプットの難しさ、世界の研究者がもつ研究に対しての情熱を感じる機会は、国際会議に参加するからこそ得られるものである。

【会議概要】

結晶成長学の基礎から応用までを専門的に取り扱う組織として、発展を遂げてきた学会のひとつである。それぞれの専門の研究者コミュニティで独立に議論されている結晶成長学に関する研究成果を横断的に取扱い、結晶成長をキーワードとする新しいコミュニティを作り、発展させている。

【発表内容】

(発表課題) 窒化カーボンナノウォールの成長メカニズム

(発表概要) カーボンナノウォール (CNW) はその特異な構造や性質から、新規カーボンナノ材料として注目を集めている。その中でも近年、CNWを窒化させた窒化CNWの応用が盛んに研究されている。しかし、窒化CNWの成長メカニズムは明らかにされておらず、そのメカニズムを明確にすることは窒化CNWの更なる応用へとつながる。本発表では、窒化CNWの成長メカニズムについて、走査型電子顕微鏡で形態解析、ラマン分光法、X線光電子分光法によりその構造解析を行い、その結果を発表した。

【考察】

1 時間半の発表時間内で、4 名の方と議論を交わすことができた。私が扱う炭素材料とは全く異なる物質を扱う方が多く、普段の発表とは違う着眼点での議論を交わすことができた。また、結晶成長に関するアドバイスだけでなく、その後の応用についても多くのアドバイスを頂くことができ、モチベーションを高めることができた。さらに初の国際学会で、外国人の方と英語で議論を交わすことが出来たことで、世界の研究者がもつ研究に対しての情熱を感じることが出来たと同時に、英語によるアウトプットの難しさと自分の英語力の不足を痛感した。今後、さらに研究および英語力向上に取り組み、次回の機会があればもっと深く議論を交わせるようにしたい。

17th International Conference on Crystal Growth and Epitaxy

(第 17 回 結晶成長とエピタキシーの国際会議)

横浜市立大学大学院生命ナノシステム科学研究科博士前期課程 1 年

小藺江 佳菜

主催団体	Polish Society for Crystal Growth
開催期間	2013 年 8 月 11 日～2013 年 8 月 16 日
開催地	ワルシャワ (ポーランド)
開催規模	約 30 カ国から 1000 名程度

【参加目的】

C₇₀ ナノシートの育成に関して発表するため

【会議概要】

ワルシャワ大学にて 10 の General Session と 9 の Topical Session と合計 19 ものセッションで結晶の成長に関する多くの発表が行われた。

【発表内容】

(発表課題)

Growth of C₇₀ nanosheet crystal by Liquid-Liquid Interfacial Precipitation method

(発表概要)

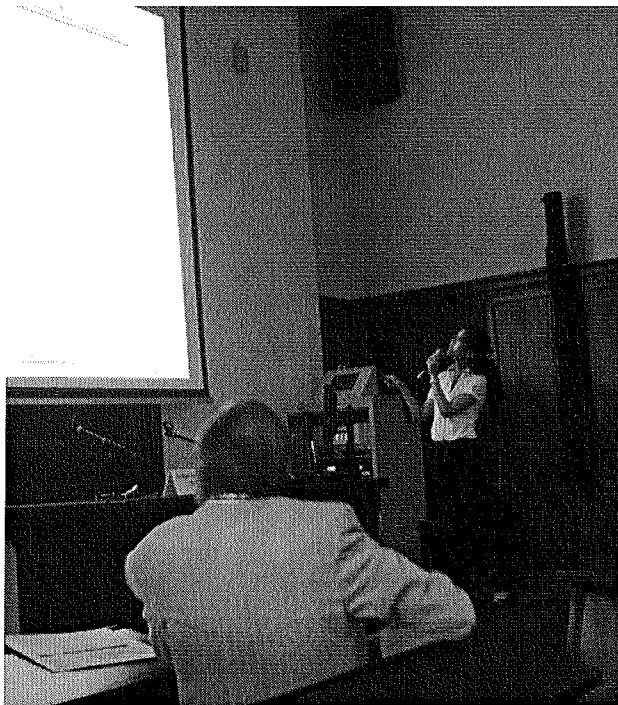
フラーレンナノ結晶は近年結晶の大きさ、形状、結晶構造に依存して特異な物性を示すために近年注目を浴びており C₆₀ ナノウィスカーや C₆₀ ナノシートなど様々な C₆₀ ナノ結晶に関する研究は多くされている。一方、高次フラーレンの一種である C₇₀ のナノ結晶も同じように特異な物性を示す可能性があるにもかかわらずまだ研究例は少ない。そこで今回 C₇₀ ナノシート結晶という 2 次元シート状の結晶を新たに育成したこと、さらに C₇₀ ナノシートの構造及び熱に対する性質について報告を行った。そして様々な国の研究者の方々から多くのご指摘、アドバイスを頂き、非常に実りあるディスカッションを行うことができた。

【会議の状況】

世界各国から多くの研究者の発表及び討議が行われ、実りあるものとなった。

【考察】

研究成果の発表及び討議を通して、近年の結晶成長研究について関心を深めることができた。また、様々な教授の方々とお話しさせていただき研究者としての考え方などを学ぶことができたと思う。これは、今後の研究活動においてとても有益であると考えられる。最後となりましたが、今回の国際会議出席にあたって、海外渡航費助成という大きな援助をしていただき本当にありがとうございました。



The 6th East Asia Symposium on Functional Dyes and Advanced Materials

第6回機能性色素及び先端材料に関する東アジアシンポジウム

横浜国立大学大学院 環境情報学府 博士課程前期2年 劉 炯昱

主催団体	近畿化学協会 機能性色素部会・エレクトロニクス部会 合同
開催期間	2013年9月3日～9月6日
開催地	台湾 新竹
開催規模	未発表（口頭発表：58人、ポスター：43人）

【参加目的】

色素材料に特化した国際学会で研究成果を発表し、参加者との議論による研究内容の検討・改善、最新の技術・理論の情報を収集する。

【会議概要】

本学会は4日間台湾の国立精華大学で開催された。有機色素及び先端材料の研究者がアジア各国から多数参加して、招待講演含む口頭発表とポスター発表を進めた。口頭発表では58人、ポスターセッションでは43人の研究者が発表した。

【発表内容】

（発表課題）

Synthesis and optical properties of novel dyes having a potential to form J-aggregates

（発表概要）

情報化社会の急速な発達によって光電子デバイスの重要性が日増しに増加してきている。特に、有機発光ダイオードと太陽電池に対する研究が活発に進行しており、これらの性能を向上させるための研究が盛んである。本研究では、これらの効率を高めるため、J会合体を形成する可能性のある新規分子の合成に取り組んでいる。

今回の研究では末端基にプロピル基とブチル基を、アルコキシのグループにはメチルからヘキシルまで、多様な置換基をつけたビスアゾメチン色素を合成した。これらの置換基が結晶構造の形成及び光学的特性にどんな影響を与えているのかを調査した結果を本学会で報告した。

【会議の状況及び考察】

私は1日目に行われたポスターセッションで上記研究の内容を発表した。韓国、台湾の大学の教授や日本の大学の先生に口頭発表を聞いて頂き、学生及び企

業の方などにポスターを見ていただいた。本学会に参加して、アジア圏の関連分野の多数の研究者に会って研究に対する色々な意見を交換し、彼らとの交流を通じて研究の協力のネットワークを形成がされたと思います。

本学会への参加に際し、財団法人横浜学術教育振興財団及び関係者の皆様からご支援に心より感謝する。

The 6th East Asia Symposium on Functional Dyes and Advanced Materials

第 6 回機能性色素および先端材料に関する東アジアシンポジウム

横浜国立大学大学院 環境情報学府 博士課程前期 2 年

島田 裕太

主催団体：近畿化学協会 機能性色素部会・エレクトロニクス部会 合同

開催期間：2013 年 9 月 3 日～9 月 6 日

開催地：台湾 新竹

開催規模：未発表（口頭発表：58 人、ポスター：43 人）

【参加目的】

本学会には有機色素及び先端材料の研究者がアジア各国から多数参加するため、自分の研究内容及び他の研究者の発表を通して様々な情報交換や議論をする。そして OLED や OFET、太陽電池開発などにおける最新の技術や理論の情報を収集する。また、本学会への参加を通して得られた新たな知識を活かすことでさらなる研究の発展が期待できる。

【会議概要】

本学会は 4 日間にわたり台湾の国立清華大学で開催された。各国の研究者による招待講演含む口頭発表と、ポスターセッションが行われた。学会側から正確な参加国数や参加人数の発表はされていないが、台湾や日本を中心に口頭発表では 58 人、ポスターセッションでは 43 人の研究者が発表した。また“東アジアシンポジウム”という名前ではあるが、スイスやドイツなどヨーロッパからの参加者も少数いたようである。

【発表内容】

（発表課題）

Photo-induced elimination of benzyl groups of 2,5-bis(dibenzylamino)-3,6-dichloro-p-benzoquinone

（発表概要）

近年、有機色素を有機薄膜太陽電池など電子材料として用いるための研究開発が盛んに行われている。しかし現時点では結晶構造と固体物性などの相関性について不明な点が多く、固体状態の物性を予測した色素材料の開発はいまだ難しい。そこ

で本研究は、構造と物性の相関性の知見を得ることを目的として行われた。しかしその検討過程で化合物が予期せぬ化学構造を起こしたため、現在はその機構解明を目指している。これまでの検討から光照射がその構造変化を誘起することが示唆されている。もしこの化学構造変化の機構が解明できれば、工業利用価値が見出せる興味深い新たな化学反応機構の知見が得られる可能性がある。

【会議の状況及び考察】

会場に入ってまず感じたのが、ポスター会場の小ささであった。聞いたところによると、開催場所が台湾であるために中国及び韓国の一部研究者が参加を見送り、前回よりも発表人数が減ってしまったとのことだった。実際、ポスターを聞きに来る人数も少なく、手持無沙汰な時間もあった。このような人類全体の利益に寄与する可能性がある研究発表の場にまで政治的な思想が関わってくることを知り、複雑な思いであった。

私は1日目に行われたポスターセッションにおいて上記研究内容を発表した。台湾の大学の教授や日本の大学の先生と学生、また企業の方などにポスターを見て頂き、質問や助言を頂いた。ただ、日常会話さえままならない英語で研究内容や自身の考えを正確に相手に伝えることはとても難しく、幾度となくもどかしい思いをした。そういった理由や外国人の参加の少なさがあってだろうか、ポスターセッションにおいて自分を含む学生は、台湾人は台湾人、日本人は日本人同士で発表をしている傾向があるように思われた。これはわざわざ国際学会に参加している意義を薄れさせてしまう行為であり、もっと積極的かつ自発的に行動すべきだったと反省している。

自分以外の方のポスターや口頭発表では、研究内容が異なる分野の研究に触れることができた。そしてその分野の基本的な情報から最新の研究成果までも収集することができた。本学会での貴重な経験を活かして、今後の研究活動、そして英語学習を行っていきたいと考えている。

本学会への参加に際し、財団法人横浜学術教育振興財団及び関係者の皆様からのご支援に心より感謝する。

11th INTECOL Congress, Ecology: Into the next 100 years 第11回国際生態学会

横浜国立大学大学院 環境情報学府・博士課程後期 2年
銭 深華

主催団体: British Ecological Society, INTECOL
開催期間: 2013年8月18日～2013年8月23日
開催地: ロンドン(イギリス)
開催規模: 約101カ国からの生態学者が参加

【参加目的】

INTECOL(国際生態学会)は、各国の生態学会を統合する組織である。1967年に設立されて以来、4年に一度、国際会議が開かれる。申請者は、今回の会議において、樹木種の遺伝的な構造が環境変動によりどのように形成され、今後影響を受けるのかについて発表する。本研究のような分子マーカーを導入した生態学的研究は、近年に報告数が増加しつつある。このような急成長を見せる分野では、さまざまな研究者と交流をすることで、方法論をまず確認する必要がある。この点において、今回の国際生態学会は非常により機会である。そして何よりも、国際生態学会では、生態学に関わるさまざまな領域の研究発表に触れることができる。

【会議概要】

INTECOLは、43個世界で一流的なシンポジウム、31個のワークショップ、56個口頭発表と11名の plenary speaker が取り上げる。今年の会議のテーマは:「生態を進め、それを数えること」。

【発表内容】

(発表課題)

Local scale population dynamics of *Abies mariesii* in a heavily snowy subalpine ecosystem in central Japan

(発表概要)

北アルプス立山連峰における先行研究により、積雪条件の異なる場所に生育する針葉樹であるオオシラビソは、樹木の形態に大きな違いが見られることが分かっている。申請者はこれまでに、マイクロサテライトマーカーを用いてオオシラビソ集団の遺伝データを抽出した。現在では、遺伝データから局所的の集団間の移住モデルを開発している。遺伝子流動パターンを定量化することにより、これらの古いオオシラビソ集団が如何にして豪雪環境で存続できるのかを示唆する。日本海側の亜高山帯では、最終氷期以降の温暖化の中で、冬の降雪量が増加してきたと言われている。日本海側の亜高山に分布するオオシラビソは特異的に雪に対する耐

性が高い。この種の存在は、そのほかの生物種の生存基盤でもある(基盤種と呼ばれる)。本研究では、高標高の生態系を根本的に支えるオオシラビソ集団を、遺伝的な特性だけにとどまらず、生理的・形態的な特性を加味して評価する。この知見は、気候変動下における生態系保全と管理に重要な示唆を与えうると期待している。

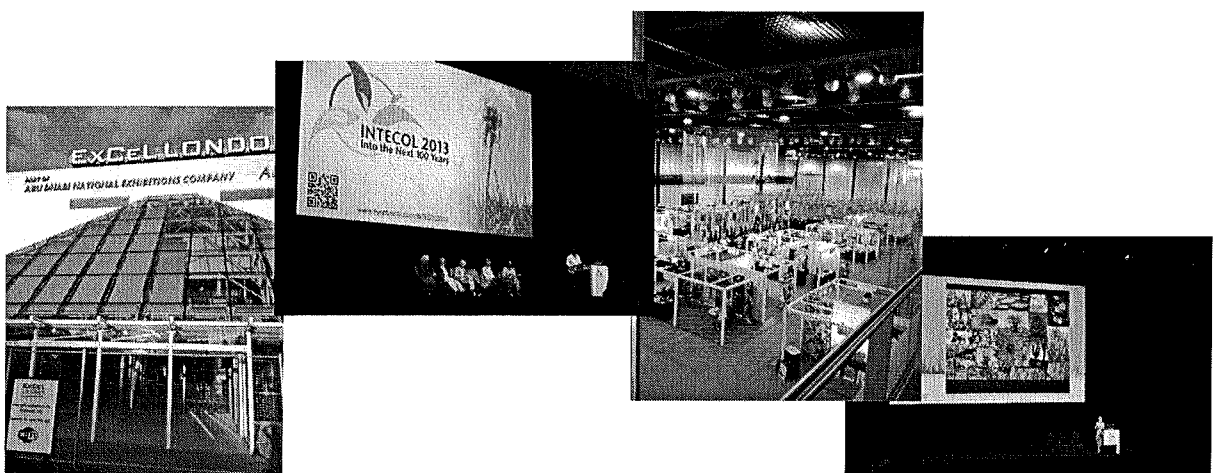
【会議の状況】

今回の国際生態学会は「Evolution in Ecology」や「Evolutionary Ecology」など生態学と遺伝・進化理論を結合させる特別のシンポジウムも有った。現在行っている個体群遺伝学的な特定の研究アプローチだけに捉われず、より広い視野を持って柔軟に今後の研究の展開に非常に役に立てた。自分の研究はオオシラビソ集団を中心、遺伝データからみた集団動態及び生態学的な効果である。これから、どのように既存データに基づき、フィールドデータの追加採集と話題の展開については、世界中有名な生態学者の発表を聞きながら、良い考えのように思われた。更に、生態学の主要なトッピング、例え「Climate Change」、「Biodiversity」、「Functional Traits」に関する発表もボリュームが有った。

【考察】

そして何よりも、国際生態学会では、生態学に関わる様々な領域の研究発表者本人に触れることができた。発表より、研究者本人と直接の交流は細かい質問まで解決することが可能。現地のフィールド調査に関するデータサンプリング方法や機材の使い方も、会場の話題になれるものだった。

自然科学研究を実施していくうえでは、世界に対して広い視野を持つ頃が重要である。これにより、環境変動下にある現在における生態系の保全についても考えることができた。今回の国際会議は、自分の研究の価値を、世界中の人と伝え、将来に社会または世界へ、素晴らしい貢献をするために重要な意味があると考えていた。



International Council of Nursing 25th Quadrennial Congress

第 25 回 国際看護師協会 4 年毎大会

横浜創英大学看護学部看護学科 講師

石舘 美弥子

主催団体 : 国際看護師協会 (ICN)

開催期間 : 2013 年 5 月 18 日～23 日

開催地 : オーストラリア メルボルン

開催規模 : 参加国数 100 ヶ国以上

【参加目的】

国際学会での研究成果発表, 看護基礎教育における最新の研究成果の収集, および海外の研究者との意見交換を目的とした。

【会議概要】

本学会は, スイスのジュネーヴに本部をおく国際看護師協会 (ICN) 主催の学術集会である。開催を主催した ICN は, 世界各国の看護師協会から構成される非政府組織で, 1899 年に国際的な保健医療専門職団体として世界で初めて設立された世界最大規模の組織である。2013 年 5 月現在, 135 協会が会員となっている。今年の学会のメインテーマは, 「公平性とヘルスケアへのアクセス Equity and Access to Health Care」である。大会では採択された抄録発表のほか, 基調講演が 1 つ, 3 つのプレナリーセッション, 19 のメインセッション, そして 11 の ICN ネットワーク会議が実施された。

【発表内容】

(発表課題)

Effectiveness of Role Play with Picture-Story Show in Pediatric Nursing Education

(発表概要)

少子化の影響を受けた学習環境の中, 子どもに接した経験の少ない看護学生 (以下, 学生とする) は子どもの対応に戸惑う現実がある。臨地実習で出会う子どもに話しかける言葉を見つけられず関わりに苦慮する学生が少なくない。しかしながら, このような学生に対する子どもへの対応に関する技術教育は未だ十分に発展していない。

筆者は, 2008 年より小児看護技術教育にプレパレーションの演習授業を導入している。プレパレーションとは, 治療や検査を受ける子どもに対し, 認知発達段階に応じた方法で説明を行い, 子どもや親の対処能力を高めるような環境および機会を与えることである。学生の臨地実習前に, 子どもに関わる訓練として, 紙芝居を用いたロールプレイを試み, 相

互実演発表会を行った。学生たちはグループで話し合いを重ね、子どもへ説明するシナリオを基に紙芝居を作成し、ロールプレイを行った。結果、本方法は学生が子どもへの対応を学ぶ効果的な教授法ということが示唆された。

【会議状況】

11 の抄録テーマ(ケアシステムとアクセス、質と経済・直接ケア、患者安全・公平性／倫理／人権・健康とウェルビーイング・歴史・リーダーシップ—管理・看護教育と学習環境・看護労働力と職場・パンデミック／災害／紛争・規制・公平性とアクセスをサポートするテクノロジー)に沿って、75 ヶ国から約 3,000 題の抄録応募があり、そのうち、シンポジウムが 88 題、口演が 512 題、ポスターセッション 567 題の合計 1,167 題が採択された。

今回、私は学会 2 日目の 5 月 19 日、Nursing Education and Learning Environment のセッションにてポスター発表を行った。テーマは、“Effectiveness of Role Play with Picture-Story Show in Pediatric Nursing”(小児看護学技術教育における紙芝居を用いたロールプレイの効果)であった。

【考察】

示説会場では、看護教育の演題が集中していた関係で各国の演者同志で意見交換する機会を得た。自身のテーマである小児看護学技術教育に導入した紙芝居の質問を受け、持参した紙芝居を提示し説明した。質疑応答を通し、日本の文化的背景などへの関心が高いことを感じた。その他の発表では、看護実践、看護管理に関連した教育事例があり、コンピュータを用いた試みは興味深かった。

会議全体としては、多くの発表があり、国が異なれば法律や制度など異なる上、人々の考え方や価値観などの側面から看護を考えていく重要性を再認識した。

【謝辞】

学会参加のための渡航費助成をしてくださった横浜学術教育振興財団ならびに関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



会場でのポスター発表



民族衣装を纏った韓国看護協会の方々との交流

ブラジル国南部2州日系永住者の 生活習慣病関連リスクに関する健康調査研究

横浜市立大学医学部社会予防医学教室・教授

水嶋 春朔

【巡回診療健診調査チーム】

- ・森口エミリオ秀幸(ブラジル連邦共和国リオグランデスール連邦大学医学部教授、横浜市立大学医学部社会予防医学教室客員教授、南日伯援護協会副会長)
- ・水嶋春朔(横浜市立大学医学部社会予防医学教室教授)
- ・北岡かおり(京都光華女子大学健康科学部健康栄養学科講師)
- ・太田幸秀(国立病院機構横浜医療センター産婦人科医師)
- ・鳥羽直弥(横浜市立大学医学部医学科5年学生)

【調査期間】

平成 25 年 7 月 27 日(土)～8 月 4 日(日)

【調査場所】

ブラジル 南リオグランデ州(イタチ)、サンタカタリーナ州(イタジャイ、カッサドール、ラーモス)

【調査規模】

南リオグランデ州の州都ポルトアレグレ市より巡回診療健診用の特製バス(南日伯援護協会所有)を利用して、イタチ(17 名)、イタジャイ(8 名)、カッサドール(12 名)、ラーモス(63 名)の各日系永住者の移住地区を巡回し、計 1,500km を踏査し、計 100 名の日系永住者を対象とした巡回診療健診調査を実施した。

【調査目的】

2008 年に移民 100 周年を迎えたブラジル国において、1960 年前後に日本と大きく食環境が異なるブラジル南部2州(南リオグランデ州およびサンタ・カタリナ州)に移住した日系永住者1世の高齢化が進展しており、肥満、メタボリックシンドロームなどの生活習慣病や合併症の状況を巡回診療健康調査(約 1,500km の行程)を通して実態把握し、効果的な予防対策を検討する。

【調査概要】

各移住地区の健診会場にて、受付、尿検査(夜間尿(約 8 時間分相当)を受診者に持参していただき、尿量、Na 排泄量(24 時間の塩分摂取量を推測したもの)を電子式塩分計(減塩モニター@河野エムイー株式会社)を使用し測定。および試験紙による尿検査(比重、pH、尿蛋白、潜血、尿糖、白血球、尿沈査、ウロビリノーゲン、ビリルビン、Nitrate)、身体測定(身長、体重、腹囲測定、体格指数 BMI (Body Mass Index, kg/m^2) の算出)、健康状態・生活習慣などに関するアンケート調査、事前採血検査結果の確認(RBC, Hb, Ht, MCV,

WBC, Plt, Glu, Cr, T-Cho, HDL-C, LDL-C, TG, ALT, PSA)、血圧測定(5分間安静後 OMRON Digital Blood Pressure Monitor HEM-907 により2回測定しその平均値を採用)、心電図検査、診察・診療、保健指導を実施した。厚生労働省特定健診(メタボリックシンドローム)診断基準にも含まれる腹囲(男性 85 cm、女性 90 cm が基準)を測定し、追加リスク(高血圧、脂質異常症、耐糖能異常)のうち2つ以上があるものをメタボリックシンドローム該当、1つのものを予備群とした。

【調査結果】

中間集計結果の一部を示す。

男性の平均年齢は 64.4 歳(最年少 10～最高齢 96)、女性は 66.0 歳(最年少 28～最高齢 92)。BMI25 以上の肥満者の割合は、男性 48.5%、女性 28.7%と日本人の調査結果(平成 22 年度国民健康・栄養調査報告)の男性 30.4%、女性 25.3%より高かった。メタボリックシンドロームの該当者と予備群を合計した割合は、男性で 61.75%、女性で 23.8%と日本人の割合(男性 27.9%、女性 11.8%)より多かった。高血圧有所見者(服薬治療者を含む)は、男性 44.1%、女性 46.8%、脂質異常症有所見者(服薬治療者含む)は男性 75.0%、女性 68.3%、糖尿病有所見者(服薬治療者を含む)は男性 34.3%、女性 15.9%であった。肥満者の割合が多く、高血圧、脂質異常症、糖尿病の所見を有する割合およびメタボリックシンドローム該当者および予備群の割合が多いことが認められた。肉の摂取頻度、摂取量が多い、食生活の影響が大きく生活習慣病の進展に影響していることが示唆された。

さらに生活習慣との関係など詳細な分析を進めていく予定である。

【考察】

日本語による保健指導や健康管理を普段受けることがない日系永住者に対して、年に一度の森口エミリオ秀幸教授の巡回診療健診に、2009 年より横浜市立大学からのチームが継続して参加して支援させていただくことは、参加学生、教員にも意義が大きいと感じた。

今後、参加学生らとともに詳細な報告書作成、報告会の準備、学会発表、論文作成をすすめていく予定である。

International Journal of Arts & Sciences
Annual multidisciplinary conference in: Mediterranean Malta

国際文理学会 マルタ学際大会

慶應義塾大学体育研究所・専任講師
鳥海 崇

主催団体 International Journal of Arts & Sciences (国際文理学会)
開催期間 平成 26 年 3 月 2 日 (日)～3 月 6 日 (木)
開催地 マルタ共和国
開催規模 参加者 約 200 名

【参加目的】

学会に参加する世界各国から集まった様々な分野の研究者を対象として、研究内容である安全水泳の現状と日本の安全水泳施策について周知すること。

【会議概要】

会議は研究内容の発表のみならず研究者同士の交流とそこから生まれる議論を推奨していた。そのため、5 日間の大会期間中、初日こそ大会会長の挨拶程度だが、その他は 2 日間の研究発表と 2 日間のエクスカージョンが実施された。発表形式は 1 人 15 分の口頭発表が約 100 題と 30 分枠のポスターセッションが約 100 題であった。ポスターセッションは従来型のポスターセッションではなく、近年テレビでよく見るプレゼンテーション番組である「TED」を模した形式であり、そのため発表資料もポスターとして印刷するものではなく、リングファイルに綴じた資料を手を持ちながら研究内容を紹介するという形式であった。

発表は朝の 9 時から夜の 7 時まで休みなく延々と実施されるものであった。1 日目の発表は、会場が 2 部屋に分かれ、2 日目の発表は 1 部屋でのみ実施された。聴者は興味ある発表について聞き、それ以外は部屋の外で食事をとったり、他の研究者と議論したりしていた。そのため口頭発表を聴取しているのは常時 20 人程度、そしてポスター発表では発表者も含めて約 40 人程度が出席しているという状況であった。発表はホテルの会議室を利用しており、快適な空間で発表を聞き、議論することができた。

エクスカージョンはバスでマルタ島を視察するというものと、マルタ島の隣にあるゴゾ島を視察するというものであった。観光がメインではなく天候も悪かったため、入場料が発生するような場所は回らず、海辺を散歩するというのもあった。

【発表内容】

(発表課題)

Japanese Water Safe Education for Elementary School Students

(発表概要)

水難事故防止を目的とした安全水泳教育について、各国の状況と我が国の安全水泳の教育施策について紹介し、小学生の安全水泳に対する意識と実態についての比較研究を発表した。日本の小学生は自身の安全水泳能力について、泳ぎの能力は過小評価しているが、逆に水に浮く能力や水に飛び込む能力は過大評価しているということが判明した。これにより安全水泳能力について、適切な能力を判断できていないことがわかった。これらの結果は安全水泳教育の先進国であるニュージーランドやノルウェーの例と比較しても同様であった。ただし性別による違いを調べてみたところ、ニュージーランドやノルウェーでは女兒に比べて男児の方が自身の安全水泳能力を過大評価しがちであったが、今回の結果からは日本の男女に性別の違いは認められなかった。今回の結果から我が国においても安全水泳教育においては、まず自身の安全水泳能力を正しく把握することが大切であると考えられる。

【会議の状況】

当初は固い雰囲気だったが、最終日が近くなると誰もが顔見知りになり、またそれぞれの分野もおぼろげながら知ることができ、互いの研究内容を紹介し、議論するという雰囲気が醸成されていた。参加者の出身国はヨーロッパを中心に多岐にわたり、アフリカや中欧、東欧といった普段あまり接する機会のない研究者とも触れ合うことができた。また、研究内容もシェイクスピアの文学から光学顕微鏡を用いた計測システムの開発といった理系の内容までこちらも多岐にわたっていた。ただし医学の内容についての研究発表はなかった。

発表者の年齢層はそれほど若くなく、比較的高齢の研究者が個人で発表に来ている、というケースが多かった。研究室単位で参加しているケースは2, 3例を確認できたばかり、それだけに仲間内だけで固まることはなく様々な研究者と交流する結果となった。

【考察】

会議が始まった当初、研究者の出身国が多岐にわたっていることが確認できたので、発表内容は安全水泳に馴染みのない国の人を対象にアピールすることを主眼に置き、変更した。これが功を奏したのか、内容が水泳という馴染みやすいテーマだったからか、かなり多くの研究者に興味を持ってもらい研究内容について紹介し、発表することができた。また、エクスカージョンでは海辺を散策するという機会が多かったため、安全水泳とリンクした議論を展開することができた。結果として様々な国の研究者と知り合うことができ、そして自分の研究を分野外の人々に周知する方法を実地で経験することができ非常に有意義な学会発表であった。

平成25年度 助成研究等報告書

発 行 日 平成 26 年 8 月

編集・発行 公益財団法人横浜学術教育振興財団